

吐鳳忌法要

小笠原登先生の志願に生きる

●愛知県あま市の出身で、ハンセン病絶対隔離政策と生涯闘った医師であり僧侶である小笠原登の事績を訪うのが「吐鳳忌法要」です。●小笠原登は、はるかに一遍上人絵伝にも描かれた、ハンセン病を患った人との触れ合いを伝える甚目寺観音の近くにある圓周寺に生まれました。祖父の願いで京都大学医学部に進み、皮膚科特研を拠点に、国家によるハンセン病絶対隔離政策に抵抗し、京都大学退官後も、無らい県運動が展開される時代に、医師として僧侶として隔離に抗い続けた人です。●その五十回忌法要が二〇一九年十二月、名古屋別院において勤修されました。そして、死後五十年を迎えることも大きな機縁となり、映画『一人になる 医師小笠原登とハンセン病強制隔離政策』が制作されました。さらに、圓周寺では「吐鳳資料展示室」が新たに開設され、残された日記等を広く展示することで、より多くの人に、より

親しく小笠原登と出遇っていただけになりまし
た。●そこで今年から小笠原登が自ら名のつた「吐鳳」の名に独自の意義を見出し、「吐鳳忌法要」をお勤めいたします。●「らい予防法」廃止から二十八年。いまだ隔離政策による被害当事者の苦しみは続いており、真の意味での「らい予防法」廃止は実現しておりません。私たちは小笠原登の志願にあらためて向き合うことにより、ハンセン病問題の全面解決に向けて、隔離された者、した者が共に解放されていく社会の実現に向けて、歩みを進めてまいりたいと思います。●どうか、すべての人々の人間解放への祈りに共感する願いの場に、ご参加下さいますようお願いいたします。

2024

12月

8日

日

吐鳳忌法要
とほうき

午後1時～ 法要 午後2時～ 記念法話

講師 玉光 順正 氏 (真宗大谷派光明寺前住職)

講題 「一人になる」—人間解放への祈り—

会場

真宗大谷派

圓周寺

「吐鳳資料展示室」新規開設のお知らせ

小笠原登の日記などを展示しています
12月8日の開室時間 10:00～12:30

愛知県あま市甚目寺東大門19 (お問い合わせ 圓周寺 TEL 052-444-0024)

●主催：吐鳳忌法要実行委員会 ●共催：真宗大谷派圓周寺

●後援：あま市、真宗大谷派名古屋教区、真宗大谷派名古屋別院

●協力：真宗大谷派ハンセン病問題に関する懇談会、映画「一人になる」制作実行委員会

どなたでも参加いただけます。



お東ネット

吐鳳忌法要 12月8日(日)

記念法話 講師 玉光順正氏

講題「一人になる」-人間解放への祈り- (要約)

今回、吐鳳忌法要で話をさせてもらうことになり、「一人になる一人間解放への祈り」というテーマを出させていただきました。

私がかねてより「親鸞・一人になることのできる宗教」等と言ってきましたが、そのことを見事に表現してくださっていたのが小笠原登その人であると考えています、

また、今もご紹介がありましたけれども、「一人になる」という映画を作ってくださいました。これも皆さんすでにご覧になったかと思いますが、監督の高橋一郎さん、そしてプロデューサーの鶴久森典妙さんが続いて亡くなられるという本当に寂しいというか悲しいこともありましたが、その映画に「一人になる」というタイトルをつけてくださいました。そういうこともあり、今回も講題に「一人になる」というテーマをつけさせていただきましたようなことです。

ハンセン病との関わり

私が個人的に岡山にあったハンセン病療養所、長島愛生園を訪れたのは「らい予防法の廃止」とか、それから、長島に橋を架けようという運動と申しますか、そういう声が上がりがけした頃でした。

そのころ、解放運動、部落解放運動とか、かなり様々な運動があったのですが、兵庫県の高校の先生の仲間が身近でいろんな運動をしてくださっていました。その中に福地幸造という先生がおられました。その先生が、私のところへもいろんな情報を送ってくださっていました。その中でも、その解放教育の運動の最後の方で、福地幸造先生が全国のハンセン病の療養所を訪れていろんな情報を届けてくださっていました。『解放教育』という雑誌をずっと出されて、その174号に、「転換期に直面するらい園の内外」という文章を出されました。そこには、「遅すぎたにしろ気がついた時点から実行上のこととして動くのが仁義だろうと思う」と書かれていました。こういう言葉を今の若い人が聞いたら何のことかわからないかもしれませんが、私はこの文章を読んで、その時びっくりしたのですね。びっくりしたというのも変ですけども。繰り返しますが「遅すぎたにしろ気がついた時点から実行上のこととして動くのが仁義だろうと思う」と。そして、私は、その言葉によってハンセン病の問題が気になり始めました。

それは長島愛生園への橋が架かるかどうかというその2年ほど前だったのですが、そのころ大谷派の寺の先輩方が愛生園に慰問布教という形でずっと前から行っておられました。最初のころは「玉光さんも行ったらどうですか」と言われたのですが、私は「いやいや、

そんなところへはとてども」と言って断っていたのですけれども、その福地先生と出会ってから「あれっ」と自分で思ったのですね。それこそ、「実行上のこととして動くのが仁義だろう」ということを読んで、これは何とか実行上のこととして動こうというのが私とハンセン病との関わりの最初でした。

慰問布教で感じたこと

私が最初に愛生園に行った頃はですね、ほとんどが真宗門徒の方々ですが、愛生園の中に西本願寺が建てた大きな会館がありまして、そこにはお仏壇があって、愛生園に行くともいつも70人から80人の療養所の方々が慰問を受けておられた。つまりお坊さんからお話を聞いておられたわけです。

私の場合は、慰問というより、何もわからないものですから、こちらがその人たちから学ぶ気持ちで、いろんなことを聞きに行き始めたというのが最初でした。ですから、私が愛生園に行きだした最初の頃は、園の人たちからよく「あんた何しに来はったんですか」ということを言われました。自分でも何しに来たかわからん。とにかく、私は状況を全く知らずに行ったものですから、本当に世界が違うようなところで、先輩方と同じように真宗の教えを語っておるつもりでいたのですが、反応が違うわけです。それで、逆に、私は、それまで真宗のお坊さんたちが行って、いわゆる慰問布教で何を語っておられたのだろうかということ疑問に思いました。最初のころは「先生の話は何もわからん」と、よく批判というよりも呆れておられたということがありました。

そんな中で、ある日、私が療養所に行ってはじめて真宗門徒の方々が集まる会館で話をしたときに、「先生、らいの話はいいんです」と。「法話をしてください」と言われたことがありました。そこでは80人くらいが集まるわけです。私自身は「らい」の問題を課題にしていたので、そういう話をしたら「先生、らいの話はいいんです。法話をしてください」と言われた。しかし、その方は、次に行ったときに、「先生、えらいことを言っちゃいました」と言われたのです。どういうことかということ、「らいのことが気にならん日は一日もないのに、お話を聞いてつい言ってしまいました」と。私が言いたいのは、私たち(法話をする側)がこういう感覚を、ハンセン病を患っていた人たちの中に生み出していたのではないかということです。「いったい何を話してきたのかな」と思いました。自分がえらいことを言ってしまった。らいのことを考えない日は一日もなかったのに、そういうことを言ってしまった。そういう感覚は、普通では考えられないことですし、私は、その時、逆に「なぜ、そういうことが(話を聞く側の人たちから)スーッと出たのだろうか」ということを、話をする側の問題として考えるようになりました。本当に学ばされたことでした。

それからしばらくして、ある女性の方でしたが、「なぜ、もっと早く来て下さらなかったのですか」ということを言われました。これも非常にショックでした。それは、何も、私の個人的なこととしてではなくて、全国各地のハンセン病療養所へ多くの先輩や同じような時代の人たちが訪れて、お説教というか、お話をしておられたわけですから、いっ

たい何を伝えようとしてきたのか。それが、真宗大谷派が同朋会運動などということを盛んにやっておってなお、ハンセン病の療養所ではまったくそういうことが語られていなかった。そんなことを我々自身の責任として思ったことです。

愛生園でのできごと

私はそのころ市川親鸞塾とか町内の同世代の人たちも含めていろんな活動をやっていたので、園へ行くのも一人で行くのではなくて、つまりお説教をしに行くのではなくて、こちらの感覚では、みんなで学びに行くという形で療養所へ行っていました。そうすると、子供連れで行くお母さん達もたくさんいましたので、園の方々も本当にびっくりされた。子供が愛生園に来ることはほとんどないわけですね。ところが、子供が行ってバタバタ暴れるものですから本当にびっくりされた。そんな時代でした。今では、園に入所する人の数が少なくて廃園になったりするところが出てきておるわけですが、私達が愛生園に行きはじめた時、そんな様々なことがありました。

そんな中で、一人だけ、ある意味で冷静に私たちのことを見ておられた方がありました。それが、同朋会の導師をされておった、藤井善と呼ばれておったのですが、伊奈教勝さんという、大谷派の寺の出身の方でした。その方が、後にこういう文章を書いてくださいました。以前にも紹介したことがあるかもしれませんが、「人間回復の橋」が架かった時に、(もちろんその前から行っているのですけれども)「その人間回復の橋を渡って玉光順正さんという方が来られたのです。「このたび橋が架かっておめでとう。今までは船でできていたけれども今日は橋を渡ったのです。人間回復の橋。いい名前です。あなたたちの人間が回復です。しかし、人間回復ということは、あなたたちの人間を回復することはもちろんですが、そこへ閉じ込めていた、隔離した側のわれわれ人間も、同時に回復するということです。あなたたちが本当に人間回復されない以上、そこへ閉じ込めた側の人間も、実は回復されないのです」。そういうことを言われたのです。その時私はひらめいたのです。「世を捨てた私、かかわりのない外、それは実はそうではなくて、私という人間がここにいるということは、私という人間だけではなくて、私に関わりのある多くの人々と関係のある私だということが、その言葉で本音として分かったのです」。こういうふうな伊奈教勝さんは、藤井善さんと言われておったのですけれども、そのことがきっかけとなって1989年に本名の伊奈教勝を名乗られたということもありました。

「一人になる」ということ

私は、親鸞聖人の教えを聞けば「一人になる」ことができるということがあると思っております。これは『涅槃経』の中に「この世で自らを灯火(ともしび)とし、自らをよりどころとし、他人をよりどころとせず、法(ほう)を灯火(ともしび)とし、法をよりどころとし、他のものをよりどころとしない人であるならば、どのようなものでも、彼らはわが比丘として最高の地位にあるものである」という言葉があります。釈尊が亡くなられ

る前に阿難尊者に話をされるでしょう。「私はこれからどうしたらよいのでしょうか」と。その問いに対して「自らを灯火として、自らをよりどころとしなさい」「他によってはいけませんよ」と。そのためには、私がこれまで説いてきた「法(教え)を依り処とし」、自分で考えたことでないような「他のものをよりどころとするな」と。いわゆる「自灯明、法灯明」という言葉を言われています。自灯明というのは、これはもう結論ですけれども、自分で考える人間になりなさいということです。仏教というのは、基本的には、一人一人が自分で考える人間になりなさいということです。しかし、自分で勝手に考えたらだめですよ。釈尊は、これまで自分が説いてきた教え、「法を灯火として生きていきなさい」とおっしゃった。私たちが、自分が考えたつものものではなく、本当に「教え」を聞く。寺でも、いろんな人がお参りをされるのは、教えを聞くというためですね。例えば「お経をあげて、それで済んだ」というのではなくて、「じゃあ、お経でも正信偈でも、そこに何が書いてあるのか」ということを本当に自分で学ぶということです。

かつては、いろいろな儀式でも、一つ一つの儀式には意味があったと思います。しかし、現代の、コロナ禍といわれるようなこの時代に、私たちが「浄土真宗の教えを本当に聞いてきたのか」。あるいは、そのことと「私たちがどう生きるのか」ということに一体どんな関係があるのかが重要です。例えば「私たちがお寺に参っていろいろなお話を聞いたり、隣近所に出かけて行ってお話を聞いたりすること」と「私たちはどう生きるのか」ということと、どんな関係があるのか。あるいは、お寺に限らず、一般的な社会の中でも、大切な教えというものが本当に語られておるのかどうかです。

今は、あらゆる意味でネットの時代です。ネットで情報はいっぱい入ってきます。しかし、本当に学ばなければならない、本当に大切にしなければならぬような言葉がネットの中に出ておるのかどうか。私は、あまりそういうものが出ておるようには思えません。これは、私自身の勝手な考えかもしれませんが、本当に、これからの時代を人間として生きていくうえで、そんな情報が現在のいろんなネットの中に出ておるのか。一方で、そういうことと一切関係のない人もいますね。今は、そういうことで、人と人とが本当に分裂し始めているのではないかと思います。そして、そういう人と人をつなぐのが、実は、浄土真宗の門徒の仕事だと思います。

親鸞聖人の教えを聞いたということは、現在のようないろんな状況の中で、親鸞聖人の教えを基本にしながらつないでいく。それが「一人になる」ということだと思うのです。小笠原登先生はそういう精神であの時代を生きられたのだと思います。もちろん、今の時代を考えるうえで、テレビとかネットとかいろいろな情報を、見聞きすることはとても大事です。けれども、その中で自分がどう生きるのか。あるいは、年配の人でも若い人でもそれを全く見ないという人もいます。今の日本の様々な状況というのは、かなりややこしいなと思います。そして、そういうことに対して、こうしたらどうだろうかというような情報が、最近の新聞やテレビやネットでも、本当に少ないような気がします。なぜそうだったのかは分かりません。

『歎異抄』に「親鸞一人がためなりけり」という言葉があります。それは、自分のために法が説いてあるということではなくて、自分は本当に「浄土の真宗」、「浄（きよ）らかな国（土）をつくる。そして、真（まこと）を宗（むね）として生きる」。そういう一人になるということです。これは誰にでもできることです。皆さん一人一人が、「浄らかな国を作りたい。真（まこと）を宗（むね）として生きていきたい」。そういう、本当に簡単なことを、親鸞聖人は、浄土の真宗と言われています。それは、一般的に考えられている宗教ではないかもしれません。しかし、誰にでもそういうことを本当に伝えることが門徒ということの意味だと思います。それは、一人一人違う方法であってもいい。けれども、何を伝えなくてはならないのかということが大切です。その時に「南無阿弥陀仏」ということがあります。「南無阿弥陀仏」を通して他人（ひと）に私は何を伝えたいのか、そういうことをきちんと考える、それが本当に話ができるということだと思います。

自分は、本当にこれからの時代をどう生きるのか、自分は本当にこう思っているのだということを伝える。そして、それを多くの人と共有する。それが浄土真宗の寺という場だと思うのです。そのような場は、もうどこにもなくなっている。そういうことを思います。それをやるかどうか「一人になれるかどうか」ということです。一人になれないから、何かわからないまま、みんなで一緒にやっているような気もします。親鸞聖人の教えというのは、正しく聞けば、誰もが一人になることができる、一人にならないと他者とはつながれないということでもあるかと思います。

おわりに

最後に、小笠原登先生のお兄さん、秀實さんの言葉をご紹介します。これは私の好きな言葉でもあります。

「足跡の残らば残れ、足跡の消えねば消えね、一人旅行く」

これについて、大谷藤郎さんは「小笠原秀實先生が、足跡の残らば残れ、足跡の消えねば消えね、一人旅行く、と読まれた歌は、足跡の消えねば消えねという後段ではなしに、足跡の残らば残れという前段こそがメッセージで、それこそが後世への励ましではないかと気づかされたのです」とおっしゃっています。それは、小笠原登先生が学会で袋叩きにされて、国策に一人で反対して国家権力からの制裁を受けるかもしれないとき、それに耐えることができたのは何であったのかということをおっしゃっているのだと思います。小笠原登先生は、（医師でもあり大谷派の僧侶でもあったのですが）、お医者さんとして「ハンセン病強制隔離という国策に反対して患者の治療をしてくださった方」だと、そういうふうに、ついうっかりと簡単に考えますが、そこに浄土真宗の教えである「みんなになるな。一人になれ」という姿勢が貫かれていることを私は感じます。

現在は、テレビやネットなどによって「みんなになる」、「みんなになりたい」人がいっぱいいます。しかし、私は、私たちが「一人になる」「一人になって、人と人がつながっていくことができる」ということだけは確かめ続けて行きたいと思います。皆さんにも、

本当に「一人になって、人とつながっていく」。ひとりぼっちになるのじゃないですよ。そういう方法が必ずある。それが親鸞聖人の教えだと、私は、確信というよりも、そういうこととしてこれからも学び続けたいと考えています。ありがとうございました。

※本文は録音の不備もあり「要約」とさせていただきました。